米原市教育委員会指定教育推進校の報告

米原市立　柏原小学校

１　研究領域　　国語科

２　研究主題　　自分の考えをもち、自信をもって表現する子の育成
～柏小メソッドを通して～

３　研究の経緯および研究内容

本校は２０１７年度から、テーマを「自分の考えをもち、自信をもって表現する子の育成」とし、児童自らが進んで学習をしていくような魅力ある学習をつくっていくために、授業改善を行ってきた。具体的には、まず始めに、「子どもたち一人ひとりが学習のめあてをもち、自分で考え、友だちと交流し、まとめ、ふり返る」という「めじとまふ」の学習展開を取り入れること。そして、アクティブ・ラーニングやユニバーサルデザインの手法を用い、『柏小メソッド』として様々な教科や教育場面で具体的実践を行うことである。

その結果、「めじとまふ」の学習展開の定着や、教科の特性を生かした学習指導の工夫などによって、児童が学習のめあてをもち、安心して学習を進めたり、生き生きと活動したりする姿が見られるようになった。しかし、子どもの学習意欲や学習内容の定着の度合いは個人差が大きく、なお支援や指導の工夫といった改善の余地は残されていた。

その中で、２０１８年度は、学習の基礎基本でもあり、特に個人差も大きく現れる国語科と算数科に教科を絞った。そしてさらに「柏小メソッド」を確かなものにしていきたいと考え、「『めじとまふ』の学習展開を工夫すること」「教科の特性を生かし、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた学習指導を工夫すること」「個に応じた支援のあり方を探り、ユニバーサルデザインの視点からの授業づくりを工夫すること」の３項目について重点的に取り組んだ。

研究実践を進める中で、「めじとまふ」の学習展開は概ね定着してきたが、「めじとまふ」を取り入れることが難しかったり、その効果が薄かったりする教科や単元も見られ始めた。そのため、活動に応じて「めじとまふ」の使い方を工夫していくことや、「めあて」をどの段階で掲示するかや、「ふり返り」のもち方や、それを全体に広めていくことなどについて、もっと考えていかなければならないことが分かってきた。さらに、学びを深めるための「交流」の活動の在り方についても考えていく必要が出てきた。

２０１９年度から２０２０年度にかけては、「米原市教育委員会指定教育研究推進校」の指定を受け、研究教科を国語科に絞り、特に交流の部分やＩＣＴの活用などに重点的に取り組みながら、研究実践を行ってきた。

２０２０年度には、それまでの研究の反省をふまえ、本年度の研究に向けて、次のような研究仮説を立てた。

国語科を中心として「読み解く力」の育成に重点を置いて「めじとまふ」の学習展開を工夫していけば、子どもたちは自分の考えをもち、自信をもって表現していくことができるであろう。

①取り組み内容と方法

この仮説を実証するため、研究内容を次の３本柱に絞って進めていく。

㋐自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫

・子ども自らが学習課題を設定し、必然性のある「活動の出口」に向かって単元全体の見通しをもち、交流を通して自分の考えを深めたり、ふり返りを通して自分の学びに気づいたりすることを重視した指導を行う。

㋑国語科の「読み解く力」の育成に重点を置いた学習指導の工夫

・ＩＣＴや思考ツールを積極的に活用して、学習課題に関連した情報を的確に取り出すことや情報を比較し関連づけて整理することや、課題を自分なりに解決し知識を再構築することなどに重点を置いた指導を行う。

㋒子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方

・ワークシートやカードの積極的な活用を図り、ふり返りを丁寧に記録させたり、授業の中での発言をつぶさに拾ったりすることで、個々の子どもの「学び」を正確にとらえ、有効な支援のあり方を考える。

以上の視点で授業改善に取り組んだ。

４　今年度の授業実践

（１）４年研究授業　　国語科　「新聞を作ろう」

〇本時の目標

読み手の読みやすさを考えながら、表記と内容の両面から推敲することができる。

〇授業の視点

・チェックポイントに基づいて、交流を通して、自分達の記事をよりよいものにしようとすることができていたか。

・推敲の仕方について、適切に支援ができていたか。

〇本時の展開

学習活動
１．本時のめあてを確認し、推敲するときに気をつけることについて話し合う。　㋮ めあて　グループで読み合って、わかりやすい新聞にしよう ２．推敲の観点を確かめ、チェック表と付箋を使って推敲していくことを知る。 ３．自分のグループの新聞を見直し、推敲する。　㋒　㋓ ４．本時の学習をまとめる。　㋔ 今日の学習でできたことを発表する。 ５．本時のふり返りをする。　㋕

〇考察

・成果

本単元は、１１名の児童が３グループに分かれ、「米原市の上水道について」、「夏の植物と食べ物」などのテーマで、調べたことを新聞にまとめる活動である。まず、研究内容㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関わって、めあてを子どもの声から拾うことで、児童自らが学習課題を設定し、主体的に取り組んでいくことができた。単元の流れを掲示したり、チェック表を使ったりすることで、児童が単元全体の見通しをもつことができ、学習を円

滑に進めることができた。

㋑の「読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関わって、推敲の観点を IWB（電子黒板）で提示したり、単元全体で、資料がいつでもタブレットで見られるようにしたりするなど、ICT 機器を効果的に活用できた。また、KWL カードやフリーカードなどの思考ツールも活用し、児童が考えを整理する時に使うことができた。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関わって、交流のグループの組み合わせを考えた結果、どのグループもしっかりと推敲することができた。

・課題

課題としては、まず、チェック表の項目をもう少し減らした方が良いのではないか。事前に子どもたちと推敲のポイントについて話し合わせておけば、もっと精選できたのではないか。また、本時では推敲を模造紙大の大きな紙で行ったが、もっと小さな紙でした方が、児童には扱いやすくて良かったのではないか。さらには、推敲も、記事を読む人と聞く人に分けて推敲しても良かったのではないかということや、具体的に推敲の良かった点を考えさせると良かったことなどである。

〇講師助言　　滋賀県総合教育センター　研修指導主事　　菅原　薫先生

研究の仮説である「自分の考えをもち、自信をもって表現していくこと」について、何のためにどんな考えを表現するのか、子どもたちが目的意識をもてるのかを考えることが大切である。

ICT 機器の活用に関わっては、最後に子どもたちが推敲した実物を書画カメラで映して、具体的に推敲の良かった点を考えさせるともっと良かったのではないか。ICT 機器を使う時は、使うことが目的ではなく、機器のよさを生かすことが大切である。思考ツールについても、その活用が目的ではなく、そのよさを生かすことが大切である。つまり、一人ひとりの子どもの考えの整理・分析・思考を促すことである。「読み解く力の育成」に関わっては、児童生徒の実態把握が必要である。それをもとに、目指す姿を想定し、実態に応じた手立てを考え、それが、児童が学びを実感できる授業になるということである。

（２）２年研究授業　　国語科　　「お手紙」

〇本時の目標

本文を手掛かりに、「登場人物二人がどんな気持ちですわっていたか」を考える。

〇授業の視点

・音読を主においた授業によって児童の学びは豊かなものになっていたか。

・ふり返りのシートは、児童の学びの深まりに役立っていたか。

〇本時の展開

学習活動
１．はじめの音読を行う。 ２．学級全体の学習のめあてを立てる。　㋮ 　めあて　がまくんの気持ちを考えよう ３．提示された部分について、２回の音読練習を行う。　㋒

その台詞に関わっていると思われる箇所に波線を引く。
波線等を元に、提示部に至るまでのがまくんの心情を考える。
４．意見を交流し、考えを深める。　㋒
５．全員による事後の音読をする。　㋐
６．ふり返りとその交流をする。　㋓

〇考察

・成果

㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関わって、まず、めあてを児童の意見から上手に引き出して設定することができていたことが挙げられる。また、学習の流れがきちんと提示されていて、児童が単元全体の学習の見通しをもつことができた。

㋑の「読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関わっては、IWB の活用が効果的であった。書画カメラを使い、文章には色分けして線を引くなど、視覚的な見やすさが考えられていた。

㋒の子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方に関しては、めあてとふり返りがセットになったワークシートが効果的であった。コメントもきちんと書かれているのが良かった。シートにシールを貼ることで子どもたちのやる気を引き出せていた。

・課題

課題としては、「がま君の気持ちを考えて音読しよう。そのための読む証拠を見つけよう。」という発問だったが、この「証拠」という言葉が子どもたちにはなじまなかったということである。「どんな風に読みたいの。」「どこからそう思うの。」という発問の方が合っていた。音読と読み取りの連携を図るように、一つ一つの言葉の読み方や間の取り方などを考えさせることが大切だった。事後の音読についても、全員一斉ではなくて、個々人が音読した方が、それぞれの考えを引き出すことができたのではないかと思われた。

〇講師助言　　滋賀県幼小中教育課　指導主事　井関　香織先生

伝える点で有効なのは、表情、口の開け方、口調である。どうしてそう読むのかという共有の部分があると良い。言語活動の設定として、単元名を「お手紙」から「『お手紙』を音読劇で１年生に紹介しよう」という単元名にすると良い。つけたい力を具体化した子どもの姿を具体的に予想する。交流の場面では、子ども同士がつながるような交流場面の設定を図ること。国語科では、ふり返りは毎回は書かなくてもよい。ふり返りを書かせるときには、期待するふり返りに応じためあてを設定すること。学びの深まりは、他者とのやりとりから知識を再構築することから生じる。読み取りを音読に活かす指導法として、「『お手紙』のこんなところが好きということから、１年生にもおもしろさを伝えたい」という展開で、１年生へという相手意識をもたせ、音読劇をするという目的意識をもたせると良い。

（３）５年研究授業　　国語科　　対話の練習「どちらを選びますか」

〇本時の目標

・自分の立場を明らかにして、理由や伝え方を考え、互いの意見を整理しながら話し合い、考えを広げたり深めたりすることができる。

〇授業の視点

・ミニディベートの活動を通して、互いの立場や意図を明確にしながら話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができたか。

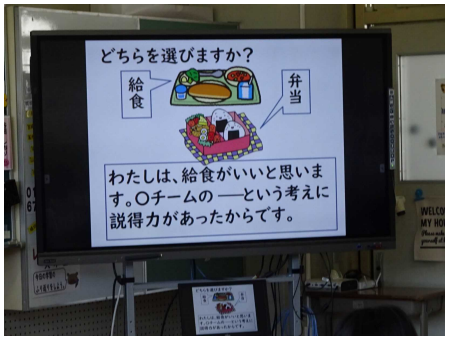
・グループでの話し合いから全体での交流の流れは、スムーズであったか。

〇本時の展開

学習活動
１．前時をふり返り、話し合いのポイントを確認する。 ２．本時のめあてとテーマを確認する。　㋮ めあて 立場をはっきりさせて話し合い、２つの立場から考えるよさについてまとめよう。 テーマ 昼食に食べるなら、給食がいいか、弁当がいいか それぞれの立場で、すすめる理由を書く。　㋒ ３．グループで討論会を行う。どの意見に説得力があったか考える。　㋖ ４．全体で交流する。 ５．まとめる。　㋷ ６．単元の学習をふり返る。　㋸

〇考察

・成果



研究内容㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関わっては、学習の流れや話し合いのポイントを、カードに書いて黒板に提示することで、児童が学習の見通しをもち、意欲的に取り組むことができた。テーマが児童にとって考えやすく、みんなが参加できるものだったことも良い点の一つである。

㋑の「読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関わっては、IWB で話し合いの順序を提示し、話し合いがスムーズに進むようにしたことが効果的であった。全体交流の場では、発表ボードを使って、視覚的にわかりやすくすることができた。グループ分けは、子ども達の主張ではなくて、くじで行ったのだが、児童は決められた立場でよく考えることができていた。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関しては、話し合いの順序を IWB で提示したことが、分かりやすく良かった。良い意見を述べた子に対しては他の児童から拍手が起こるなど、学級の雰囲気も良かった。

・課題

発表ボードを使って全体で交流する時に、発表者の児童が IWB の方を向いて発表していたので、聞き手の方をきちんと向いて発表できるように、メモを持たせたり、意識して話し手の方を向くようにさせると良かった。

（４）１年研究授業　　国語科　　くわしくかこう「しらせたいな、見せたいな」

〇本時の目標

・知らせたいものの特徴について、短い言葉で書くことができる。

〇授業の視点

・観察の観点を示すことにより、自分の考えをもつことができたか。

・質問のやりとりをすることによって、自分がきづかなかった特徴に気づくことができたか。

・書くことが苦手な児童に適切な支援ができていたか。

〇本時の展開

学習活動
１．学習課題を確認する。 �め めあて　しらせたいもののようすを、みじかいことばでかこう。 ２．描いた絵をもとに、知らせたいものの特徴を書き込む。 ㋒ ３．友達と見せ合い、短い言葉で書くことを増やす。 ㋒　㋑ ４．本時のふり返りをする。 ㋺　㋭

〇考察

・成果

㋐の自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫に関しては、黒板に調べる物の写真を貼ったり、着目するポイントをカードに書いて貼ったりすることで、学習の進め方がわかり、何に気をつけて調べていくかを理解することができた。

㋑の国語科の「読み解く力」の育成に重点を置いた学習指導の工夫に関しては、カメラでとった見本の写真をテレビ画面で映すことで、視覚的な分かりやすさを工夫していた。サーキュレーターの見本を黒板に提示したことも良かった。

㋒の子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方に関しては、担任が、丁寧にわかりやすく説明することで、学習課題の多い児童もするべきことを理解して、学習を進めることができた。

・課題

本時では、ペアの組み方を違う物を選んだ者同士で行ったが、互いに自分が取り組んでいない物で、相手に何をアドバイスするのか、よく分からないペアもいたので、理解度も考えて組む必要があるだろう。また、ふり返りカードの書かせ方であるが、本単元では、単元全体を通して各時間ごとに書いていくカードであったが、本時での話し合いで気づけたことや推敲できたところなどについてかけるような項目があれば、より深いふり返りができたのではないだろうか。

（５）３年研究授業　　国語科

「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」～食べ物のひみつブックを作ろう

〇本時の目標

・分かりやすい文章の組み立てや例の書き方を理解し、友達と助言し合って、よりよい組み立てや例の書き方を考えることができる。

〇授業の視点

・学習したことをもとに、文章を組み立て、友達と助言し合って、組み立てや例の書き方がよりよくなるように工夫することができたか。

〇本時の展開

学習活動
１．本時の学習のめあてを確かめる。　㋮ めあて　分かりやすい文章の組み立てやれいの書き方を考えよう。 ２．分かりやすい説明の仕方についてふり返る。 ３．文章の組み立てや例の書き方を考える。　㋒ ４．考えた組み立てを友達と読み合い、気づいたところを助言し合う。　㋐　㋷ ５．学習をふり返り、次時への見通しをもつ。　㋸

〇考察

・成果

㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関しては、単元の流れが提示されていて、見通しをもって取り組むことができた。

㋑の「国語科の読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関しては、IWB で、ワークシートなどを提示することで、児童が活動を進めやすかった。また、資料が豊富に用意されていて、児童が調べる上で、とても役に立っていた。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関しては、ワークシートが良く工夫され、付箋のサイズまできちんと計算されていて、書きやすかった。付箋は組み立てを考える上で有効な手だてであった。ふり返りは、書き出しを決めて書くことができていた。

・課題

IWB でいろいろな提示をしていたが、パワーポイントのスライドショーを使えば、さらに見やすかった。資料の書画カメラによる提示が少し暗くて見づらかった。児童一人ひとりの、食品のでき方のとらえ方が違っていたので、児童が共通の土台に立てていなかったのではないか。また、食品の作り方が児童にはきちんと理解できていたかが疑問であった。児童によっては、あまりにもおおまかすぎて、作り方が良く伝わらないものがあった。どこまで詳しく作り方を紹介するのかがむずかしいところである。組み立てを考えるときに、付箋を並べていくのだが、その並べる基準がわかりにくかった。

〇講師助言　　滋賀大学教職大学院　　白石　牧恵准教授

本単元では、食品が作られる「順序」が大きなキーワードになる。自分の考えを読み手に分かりやすく伝えるために、どのような順序で説明するかを考えることが重要である。国語科として大事なポイントは、低学年のうちに「順序」に意識をもたせること、中学年では、自分の考えと理由・事例との関係に気づかせること、高学年では、始め・終わりの工夫など文章全体の構成を考えることである。特に、中学年では、順序の必然性が求めら

れる。

学習の流れは、教室の廊下側に掲示しておくと良い。材料や工夫など食品について調べたことをマップで表すやり方であるが、うまくやらないと単なるレシピ集になってしまうおそれがある。「どんな食品に姿を変えるか調べよう」のめあてを提示して進めていけば良い。IWB の活用については、カメラで、ワークシートの推敲前と後とを提示して比較するなどすることも重要である。

（６）６年研究授業　　家庭科　　「くふうしよう、おいしい食事」

〇本時の目標

・おいしく食べる調理計画の工夫を考えることができる。

・効率よく調理するためのプログラムをつくることができる。

〇授業の視点

・今まで学習してきたことや家での生活経験を活かし、調理計画を考えることができたか。

・調理計画を考える学習において、プログラミング的思考を活用することが有効であったか。

・計画したことを交流する活動を通して、自分が気づかなかったことに気づいたり、計画したことを訂正したりすることができたか。

〇本時の展開

学習活動
１．前時までの学習をふり返る。 ２．プログラミングの方法を確認する。 ３．本時の課題を知る。　㋮ 　めあて　おかずとみそ汁の調理計画をプログラミングしよう。 ４．調理計画をプログラムする。　㋑ ５．計画したことを交流する。　㋒ ６．本時の学習をふり返る。　㋷ ㋸

〇考察

・成果

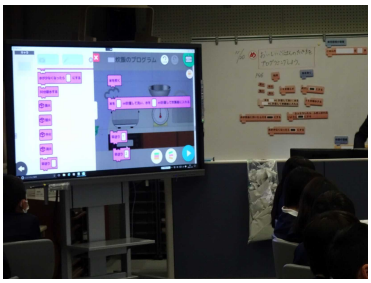
この授業は、米原市の指定研究を兼ねたプログラミングの授業であり、本校の研究教科である国語科ではない。しかし、ICT の活用という本校の研究の目的の一つには十分当てはまる授業であった。㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関して、活動の出口がわかりやすく、児童はそれまでの学習の中でソフトの使い方を理解して、意欲的に活動していた。ペアでの交流では、片方のパソコンを閉じさせて、片方のパソコンを開けておいて話し合うというやり方が、集中できて良かった。

㋑の「国語科の読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関して、自分が考えた計画の良い点や不備な点がすぐに分かるという利点をもったプログラミングソフトを使って、いろいろと考えられたことである。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関しては、ソフトに慣れ親しませるために、周到に準備をし、できる限りソフトを理解させようとした

ことが良かった。

・課題



計画したことを交流する段階では、ペア設定が重要で、よく理解できている子とあまり理解できていない子とのペアでは、理解できていない子が助けられることが多かったが、中には片方の子が置いていかれているペアも有ったので、ペアの決め方が課題の一つになった。また、家庭科の調理に関わる授業なので、児童の家庭での調理経験の差が、本時では表れていた。すなわち、調理経験のある子は手順が分かっていて、計画を立てるのもすらすらとできていたが、調理経験のない児童は何を一番にしたらいいのか､次にどうしたらいいのかなどが分かっておらず、手順を反対にするなど、現実的に不合理な計画を立ててしまう児童もいた。やはり、事前に調理の説明などをしておき、本時に臨んだ方が良かったのではないだろうか。

（７）はびろ研究授業　　自立活動　　「注文の多いはびろ料理店」

〇本時の目標

・接続後や、主語・述語の使い方など、これまでの学習を活かして、分かりやすく遊びのルールを伝えることができる。

・たくさんの先生と関わって、いろいろなゲームを楽しむことができる。

〇授業の視点

・児童はこれまでの学習をいかしながら､わかりやすく説明することができていたか。

・場の設定やルール説明の方法は、児童の個別の課題に応じた支援になっていたか。

〇本時の展開

学習活動
１．本時のめあてをつかむ。　㋜ めあて　遊びのルールを説明して、先生方と楽しく遊ぼう ２．先生方といろいろなゲームを楽しむ。㋛ ①ルールを説明する。 ②先生とゲームをする。 ③次のゲームを知らせる。 ３．活動を終え、先生方に感想を聞く。　㋝ ４．本時のふり返りをする。　㋟

〇考察

・成果

本時では、児童が、先生と遊べるということで、意欲的に取り組んでいた。㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関しては、進め方をパワーポイントで提示したことで、流れをよく理解することができた。

㋑の「国語科の読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関しては、先生の反応を見ながら、自分の説明が足らないことに気づいたら、補足して説明することができていて、わかりやすく伝えるというめあてが達成できていた。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関しては、担

任は、児童の説明で足らない点があれば、すぐに補足するように促すことができていた。話形の提示もされていて、児童はつなぎ言葉などに注意しながら、説明することができていた。内容はかなり多かったが、タイマーを使って時間を決めていたので、進行はスムーズに進められていた。

・課題

内容がかなり多く、全部の活動をこなすことができなかった。

〇指導助言　　県総合教育センター　係長　甲津　千秋先生

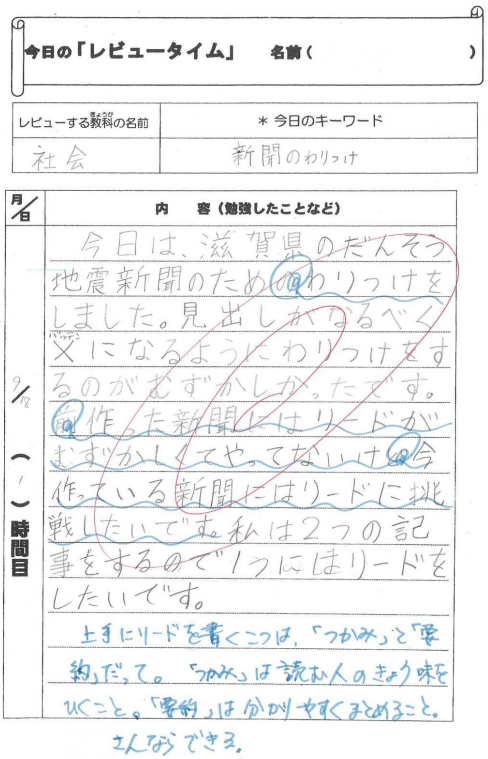
担任の温かい雰囲気の中で、児童が安心して授業に臨めていた。自立活動とは、障がいで困難な部分を克服しようという活動である。各児童の実態に応じて、児童の困難な部分に焦点を当て、大事な所を想定して行うことが重要である。児童の実態から、つけたい力と指導内容を考えることが大事である。

５　その他の取り組み

〇「レビュータイム」の取り組み

また、毎週、火・木・金曜日の帰りの会の後に、「レビュータイム」として、その日の学習についてふり返りをしている。月に１回、校長が目を通して、コメントを書いている。児童もすっかり書くことに慣れ、その日の学習をふり返って記入している。このふり返りをすることで、学習内容の定着を図ったり、次への見通しをもったりすることができている。

児童のレビューノート



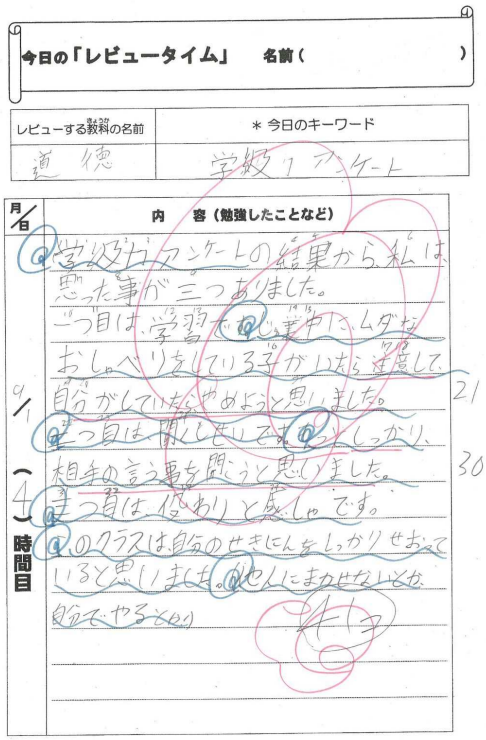
今日の「レビュータイム」　名前（　　）

レビューする教科の名前	＊今日のキーワード
社会	新聞のわりつけ

月/日	内　容（勉強したことなど）
9/12（1）時間目	今日は、滋賀県のだんそう地震新聞のためのわりつけをしました。見出しがなるべく×になるようにわりつけをするのがむずかしかったです。作った新聞にはリードがむずかしくてやってないけど今作っている新聞にはリードに挑戦したいです。私は２つの記事をするので１つにはリードをしたいです。

上手にリードを書くこつは、「つかみ」と「要約」だって。「つかみ」は読む人のきょう味をひくこと。「要約」は分かりやすくまとめること。

さんならできる。



今日の「レビュータイム」　名前（　　）

レビューする教科の名前	＊今日のキーワード
道徳	学級アンケート

月/日	内　容（勉強したことなど）
9/1（4）時間目	学級アンケートの結果から私は思った事が三つありました。一つ目は、学習で集中しムダなおしゃべりをしている子がいたら注意して自分がしていたらやめようと思いました。二つ目は、聞くことです。しっかり、相手の言う事を聞こうと思いました。三つ目は、仲ありと感じゃです。このクラスは自分のせきにんをしっかりせおっていると思いました。人にまかせないで自分でやる。

21

30

○「ラインズ」の取り組み

本校は、平成３０年の１０月から「ラインズ　ｅライブラリー　アドバンス（通称ラインズ)」に取り組んでいる。週１回、学年ごとに曜日を変えて、朝のさわやかタイムに、コンピュータ室で行っている。教科は、国語・算数・理科・社会で、単元ごとにドリルをしたり、復習テストをしたりすることができる。また、英語科も含めて、テーマ学習にも取り組むことができる。例えば国語科では、「言葉の使い方」や「言葉を豊かに」、「古典と詩歌の世界」などのテーマごとに自分のペースで学習を進めていくことができる。

学校では、今学習している内容の復習をしたり、単元が終わったときにまとめとして学習したり、以前学習した内容を思い出して、理解の定着率を上げるために取り組んだり、自分の選んだテーマで学習を進めたりと、様々な学習活動に取り組んでいる。

また、これは家庭でもパソコンを使って取り組むことができ、普段の自主学習や、長期休業中の課題としてなど、家庭学習の一部ともなっている。

２学期末に、児童にラインズのアンケート調査をしたところ、以下のような結果が出た。

設問１　「ラインズはおもしろい、楽しい？」

・とてもそう思う	５３.８％
・まあそう思う	３７.３％
・あまりそう思わない	６.６％
・そう思わない	１.９％

設問２　「ラインズは勉強の役に立っている？」

・とてもそう思う	６５.１％
・まあそう思う	２９.２％
・あまりそう思わない	４.７％
・そう思わない	０.９％

設問３　「学校でラインズを使うことをどう思う？」

・よい	６４.９％
・まあまあよい	３３.０％
・あまりよいとは思わない	２.１％
・よくない	０.０％

設問４　「来年もラインズを使いたい？」

・とてもそう思う	７１.７％
・まあそう思う	２０.８％
・あまりそう思わない	５.７％
・そう思わない	１.９％

調査結果を見ると、「ラインズはおもしろい、楽しい？」や「ラインズは勉強の役に立っている？」の設問に対して、肯定する児童は約９０％となっている。また、「学校でラインズを使うことをどう思う？」の設問には、約９８％の児童が肯定している。「来年もラインズを使いたい？」の設問に対しても、約９０％の児童が肯定している。このことから、児童はラインズを非常に楽しみにしており、また学習に役立つものととらえていることが分かった。今後も、このラインズの活用を図っていきたい。

以下はラインズアンケートの児童の感想である。

○楽しいので続けてほしいです。(2年)
○ラインズは勉強にとても役立つから、来年もラインズがあるといい。(3年)
○テスト前にやるとふりかえれるし、前の勉強のことも思い出せるのでいい。(3年)
○私は勉強が終わるとすぐに忘れてしまうので終わってから復習ができて、思い出せるのでいいと思う。(4年)　○予習復習ができる。(4年)
○パソコンに慣れることができて良い。(5年)　○気軽に予習復習ができる。(5年)
○ラインズで出てきた問題が、テストに出てきてその問題を思い出して解くことができた。(5年)　○テストの点数があがった。(5年)
○家でもできて楽しい。いろいろな勉強の種類があるので、楽しめる。(5年)
○単元に合わせて、学習ができるところがいいと思う。まちがったときに、解答・解説があるのがいい。(6年)
○ラインズは、わからなかったらヒントを見て「こうすればいい。」とか自分で気付けることがあるのでいいと思う。(6年)　○何回も繰り返して、学習できる。(6年)
○社会のキーワードは楽しい。自分のペースで取り組める。(6年)

これを見ても、児童のラインズに対する意欲や関心の高さがうかがわれる。

６　今後の課題

本年度の市の学力状況調査で、本校５・６年生は、国語科は、基礎はかなりできているが、活用が弱いという結果が出ている。言語活動への意欲は高く、基礎的な力ももってはいるが、考えをうまく文章にまとめたり、考えをわかりやすく伝えたりすることが苦手であるということである。

本年度は、研究内容の㋐の「自分の考えをもち、交流を通して考えを深めていく学習展開の工夫」に関しては、単元の流れを掲示することで、児童に学習の見通しをもたせることはできてきた。学習課題を子どもの声の中から拾い出し、設定することもできていた。交流に関しては、いろいろな工夫を図ってきたが、メンバーの構成や交流のさせ方など、まだまだ考えていかなければならない課題が出てきた。

㋑の「国語科の読み解く力の育成に重点を置いた学習指導の工夫」に関しては、ＩＣＴや思考ツールの積極的な活用が図れ、学習の様々な段階で、児童の考えを助けることができてきた。しかし、課題を自分なりに解決し、知識を再構築することについては、まだ不十分である。

㋒の「子どものよさを引き出す、個性や個人差に応じた支援のあり方」に関しては、ワークシートやカードの積極的な活用が図れた。ふり返りについても、定着が見られてきたが、その内容は授業に応じて対応していかなければならないことが分かってきた。個々の子どもの「学び」を正確にとらえるためには、ワークシートやふり返りをきちんと見ることや、授業中の発言にしっかり耳を傾けることが大切であるということをより一層認識した。

以上の課題を基に、来年度もさらに実践を重ねていきたい。